

崇武館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（その7）

武の道は 和の道究め 和を求む道

出典・・・大塚博紀の道歌（その4）

5 流派名の持つ和の意味

(1) 天地人の理道に和す

『天地人の理道に和す（和天地人之理道）』は、道歌でないが大塚先生が好んで使われた言葉である。心身の調和こそ武道修練の究極の姿と看破されたところに、理想の高さが伺える。後に述べるように、この言葉が流派名「和道流」に繋がった可能性も高い。

先月と同じように大塚先生の著書「空手道」(第一巻)《師範語録》の「武技は和の術」(11頁)から、どのように使われているか引用してみよう。

武道は和の道であり武技は和の技である。和の表現された形が武技である。和の表現である武技を錬磨することによって和の道である武道の理念に徹し、和を貫徹する精神を修養することができるのである。武技は和の表現で決して無理がない。理論的であり科学的でも。天の道に背かず地の理に逆らわず人の道に悖らず天地人の理道に和するのである。吹く風の如く流るる水のその如く大自然の理道に和するのである。水は常に低きに向かって流れる。岩壁や堅固な堤防につき当たればそれを避けスムーズにそれて流れて行く。工事の粗悪な堤防なら蟻の一穴よりの譬の如く少しの隙間も見逃すことなく浸透してこれを崩壊し押し流してしまう。風もそうである。また水上に浮かぶ瓢箪は如何なる激浪にも抗することなく波浪に乗ってこれをさけるので沈まない。「流す」「往(いな)す」「乗る」など、日本武道独特の術語は真に適切なる表現語である。技は常に相手の強い力に抗することなく、その力を利用してこれを流し、相手の力から己れを防御し、流して己を防御する力が反対方向への力となって相手を攻撃するのである。水車は流水の力に抗するのではなくその力を利用して廻転しその力が反対方向に働くのである。風車も同様で槓槓

(てこ) 作用による力の運動で防御も攻撃も天地自然の理道に和するものである。

明治時代初期の教育者、啓蒙思想家として偉大な足跡を残した福沢諭吉（1835～1901年）は、『天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず』の言葉を残した。この項のテーマと同じ「天」とは何を意味するのだろうか。

本来の「天」の字は、頭上を覆い高く広がる大空のことで、古くは天穹（てんきゅう）とか、広がる青い空の意から穹蒼（きゅうそう）と呼んだ。更に宇宙界を支配する神を指す場合もあれば、神や仏の住む世界でもある。人間界最高支配者の王なら天帝とか天皇や天子となる。他に地上界に対して自然界の全て（天然）である。



福沢諭吉

天の解字は、「両手両足を広げ大の字に立った人間」の頭上高く平らな部分に横一本の線を引いたもので、これを指事文字という。しかし、天地人でいう「天」は、人智人能の及ばない人間世界以外の偉なる意思を示すとみることができる。そこには元来あった（天衣無縫、本性）もの、本来あるべき姿があって、正義に裏付けされた存在である。天を表わす言葉には「天人」（天意と人意）、「運を天に任す」、「天命」、「天災」（対語：人災）、「天寿」、「天分」、「天才」、「天真爛漫」などがある。

次いで「地」の方は、地は大地であり領土・国土であり、耕地や生産の基盤で、住み暮らす環境や土地柄も含まれる。地球上には、人類を含む無数の生物が生息している。天地を合わせて考えれば、それらの全てが「天（太陽）」の光に浴し「地」いう土台がなければ存在は不可能であり、根源はやはり「天」と「地」に他ならない。「地大物博」とは土地が広大で産物も豊かなことを指し、地の実りや資源が生命を支え文明文化を育んできた。

また、「地に足がつかない」は落ち着きなく浮き立つことで、「地の利がる」なら土地柄や情勢が有利に働く状況となる。困ったことに、この地（地球）も、全域で環境汚染、資源の使い過ぎ、温暖化現象など歯止めがかからない状況になっている。

古代中国には次の思想があった。[葉適（1150～1213年、南宋永嘉学派）の「葉適思想淺説」から]

「聖人は天を敬して責めず、天を畏れて求めず。天自づから天道あり、人自づから人道あり」なので、天地は結合された一つの世界を意味する。天地の間にある形あるものは一つとして同じものはなく、それぞれに理（ことわり）がある。そして、人は人間世界に共通する仁義礼智信という理があって、この理と近似する概念に道がある。「理」に対して「道」はより含みの多い概念で、それは天地や人や万物に則

して存在する基本的な原則であるとともに道理だからである。

「人」はいうまでもなく生きとし生きる私たち人間である。

この天地人は、『天は絶対的な力を持つ正義の父として、地は私たちを包み込む母の存在として、人は道理にしたがい繁栄を築くもの』と解釈できないだろうか。

だから、『天の道に背かず、地の理に逆らわず、人の道に悖らず、天地人の理道に和する』は、全能の天の意思に反せず、万人の目から見て恥とにならないよう徳を積み、環境や社会の摂理に反しない倫理観を日常とし、尊厳を守り世界平和に貢献すること、としなければならない。

引用文にある「吹く風」「水の流れ」は次項と関連して述べる。

(2) 武道と球体

天地人の理道につづいて、武技は球体の如くあるならば無限に変化し、業（わざ）は極限なく宇宙の如く無限大であると説く。(1)に続く文を引用してみよう。

武道の攻防は一連で自然の理法にかなっている。武技の変化は球転の如く自分の身を移動することによって相手の実を往なしこれを制して虚となしつつ、己れの実が相手の虚をつくのである。あたかも卓上をまろぶ球の運動の如く球に加わる力に抗することなくこれを流し自然の道理に和してスムーズにまろぶのと同様である。然し武技は卓上をまろぶ固定形の球転ではなく、空間をまろぶ柔軟な気体の球転である。固定形の球は平面の上はスムーズにまろぶが凹凸面は滑らかにまろばない。気体の球は如何なる面も空間も自由に外力に阻まれることなく柔らかにこれを往なしつつ時には楕円形となりあるいは波状形に変わりつつ滑らかにまろびもとの球体に復するのである。気体の球は如何なる外力にも抗することなく無限に変形してこれを軽く往なす。無限に変形するから面も極も無限に変化する。だから形あって形なく面があって面がなく極があって極がない。形も面も極もその変化は無限である。武技は気体の球の如くその変化は極限がなく宇宙の如く無限大である。宇宙の如く無限大であるから空である。無限の球であるから全てを抱擁して和となすことができる。宇宙の如く無限の空であるから武技には極致の技はない。その技は千変万化無限大で宇宙の真理に通ずる。

この引用文は、(1)よりも理解し易いと思う。読者諸氏は、今まで沢山の空手道関係書物を紐どいてきたと思うが、今までこのような文面に会ったであろうか。技術や技法を懇切に説いた書物は沢山あるとしても、武道哲学と関連させて武技を説きつつ、実践に移すとすれば並みの人間には困難と思われる中味である。著書「空手道」は、「実技篇」もまた微に入り細に入る解説で、姿の良い素晴らしい写真と文章に満ちている。

後にも触れるが、稀有なる文章になったのは幼少時から母方の大伯父・江橋長次郎から柔術を学んだのを初志とし、神道揚心流柔術三世・中山辰三郎、空手道・

船越義珍（1868～1957年）他、剣術を柳生新陰流・久保義八郎（1889～1949年、徳島県出身）など、いずれも当代一流といわれる武道家との師弟関係によって、我が国古来固有の武道理念を熟知したからに相違ない。

その中で、「水は低きに流れ風もまた同じ」は、「固定形の球転」ではなく「柔軟な気体の球」となして「相手の力を往す」とか、『無限に変化するから形も極もなく無限大である』と説いている。

これらを読み空手技法の中でいかに活かせばよいか戸惑いも多いのでなかろうか。何故ならば、単に身体を躲し回転させるだけでは「固定形の球転」から抜け出せない。例えば、和道流の基本組手（待の形）にしても普通に使えば「固定形の球転」に他ならない。固体形の人体を用いて「気体の球」「液体の球」へと転換させるのは容易でない。苦心惨憺を経て稽古を重ね、心身一如をもって至高の境地に達しなければ無理というもので、自分たちの練習法や考え方と掛け離れていることに気付くはずである。

練習を始めようとするとき、準備体操を終われば直ぐに「突き」「蹴り」から入りその強弱ばかり気にしてしまうが、確かに「突き」「蹴り」も大切な要素の一つではある。それに、初心者の場合は前方に向かう攻撃技の方が理解し易く空手らしさを意識できると思う。『天地人の理道に和す』考えから練習法を探るなら、その違いは大きくなる。例として現代の空手試合（空手競技）から考証してみよう。

最初に組手試合であれば、先生の論法では攻防自在（攻防一如）のはずなのに、実際は相手かまわず攻撃優先（早い者勝ち）が際立つ特徴を持つ。競技ルール（規定）も攻撃の部位によって得点（ポイント数）が異なり、時間内に数多く得点する（8ポイント差で勝ちなど）ことで勝敗は決する。したがって、日常の練習の大部分は、相手側より早く攻撃技が相手に到達する練習法を優先させるため、構成する技の種類は極めて少なくなるので、技能と身体は片寄った発達となってしまいうだろう。

もう一つある形の試合なら、形は伝承されてきた体の運用と、空手本来の伝統的な技法の集積とともに精神性の発揮であるはずなのに、単に手足の動きが強烈な方に勝ちが宣告されてしまう。大会における必要数（国体なら決勝まで6つ）の形を順序さえ覚えれば事足りるため、相手を想定した武技の訓練と身体の活用は遠のく。

以上を合わせて指摘するならば、単純極まりない攻撃行為重点であったり、勝敗のみに拘ったり、明確な目的意識がないまま単なる強さだけ求めて練習を続ければ、頭脳も単純な仕組みに止まり高度な発達にまで到達できないので、理想理念や情操は低レベルのままに終わる。武道が人間性（人格）形成に関わるとの位置付けは、誰しも肯定する事実であることも念頭に置くべきで、互いに切磋琢磨して得られる知能と道徳観の育成は、元来持つ最大の目的であること再認識しなければならない。何年か前、勝利至上主義のスポーツマンを揶揄（やゆ）した言葉として、『ジャージを着たゴリラたち』という新聞見出しがあったも思い出してほしい。

大塚先生の著書に記載されている理想は、他武道の中にも遍く存在する武道精神の柱である。他武道の技法や理念に関しては別の機会に述べるとして、今回は6と7の項で世に知られる「道歌」や「辞世の句」を掲載するに止める。

相手の思惑（狙い）とするところを素早く見抜き、強力に突進してくる勢いを削いで流し、隙の一穴を探り、相手の力を利用して我が利とするなど、途轍（とてつ）もない難題を授けられている。しかし、生涯を通うじて体力を頼りの練習とその考え方でいいのか自問すれば、自ずから修業の価値観や目標設定への思索は働き易くなるであろう。

大塚先生の著書から何箇所か引用して自説を述べてきたが、著書には膨大な字数の教えが残されている。何れ近いうちにまた取り上げることを約束しよう。但し、和道空手が少しできるようになったとあって、理法や技法を理解できたなどと思うならとんでもない間違いと言わざるを得ない。天才的な頭脳と豊かな武道才能を持ち、更に過酷な修業を重ねて到達した境地は、我ら凡夫が何で容易に分かることできるだろうか。素晴らしい空手道との出会いを喜びとして、ひたすら後を追いつけるだけで十分価値ある行為だと私は信じてやまない。

（3）和天地人之理道の出典

「天地人の理道に和す」を Yahoo! で検索すると、「先人の言葉から学ぶ」（崇武館ホームページ・ワンポイントレッスン）がトップ掲載されているのに驚き、今後は迂闊なこと書けないと自省してしまった。

この言葉の出所に触れなければならないが、老子の書いたとされる「老子道德経」第25章を出典とすると言われてきた。第25章には天地人を道理の柱とする記載は確かに存在するが同じ言葉は見付からなかった。老子以外の古典にないかと探してみたが、やはり発見に至らなかった。浅学を恥じるが、お分かりの方は是非ご教示願いたい。

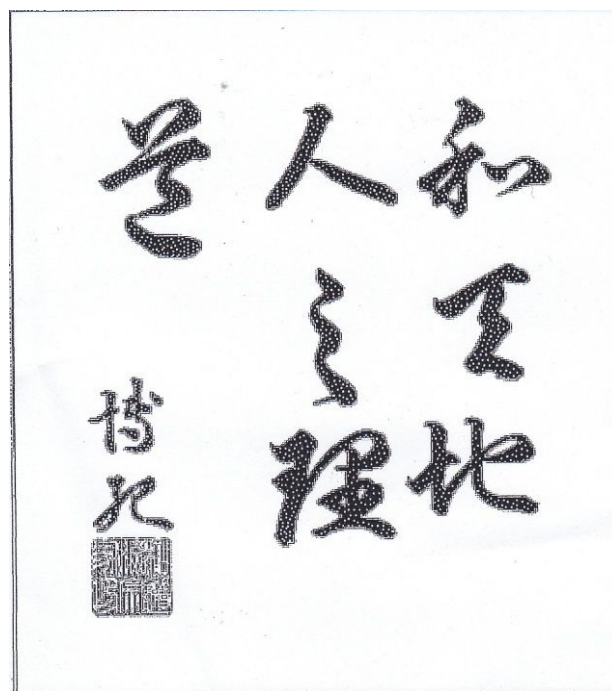
また、第25章には次の記載がある。『人は地を規範とし、地は天を規範とし、天は道を規範とし、道は自然を規範とする。（人法地 地法天 天法道 道法自然）』であり、「天地人」と語順が逆転した表現となるが、この章の前段文章に対する補完として読めばよい。

老子は、中国春秋時代（BC770～BC481）の思想家で道教創案者の一人であるが、出生は紀元前6世紀から紀元前4世紀などの諸説あって定かでない。孔子が礼の教えを受けるため老子を尋ねたとの記載もあるが、現今の研究では否定されている。彼は13度生まれ変わって生き続けたなど謎の多い部分もあって、実在性を疑問視する向きさえある。

また、合気道創始者の植芝盛平（1883～1969年）も求道鍛錬した境地を『天地人和合の道』と書いており、一時代を築いた武道家たちの言葉に一致を見ることができ

る。

大塚博紀先生は昭和 57 年（1982 年）1 月 29 日天寿を全うし永眠なされた。2 月初めに東京都港区南青山の「青山葬儀所」で神式に則りご葬儀が執り行われたが、会葬者に配られたのが先生の揮毫を複製した次の色紙であった。



（４）流派の名乗り

大正 11 年（1923 年）7 月末、大塚先生は船越義珍に入門し、形の名人といわれた摩文仁賢和（1889～1952 年）や実戦空手の雄である本部朝基（1870～1941 年）と技術交流。小西康裕（1893～1983 年、神道自念流）、合気道の植芝盛平などとの交友を経て、遂に昭和 3 年（1928 年）独自の技法完成に至った。また、昭和 6 年から柳生新陰流剣術を久保義八郎から学び、その直後「日本武道振興会」に加盟し同会の中で富田流小太刀を学ぶ。昭和 9 年「大日本空手道振興倶楽部」の名の元に独自団体（一流派）として名乗りを上げる。昭和 13 年（1938 年）流派名を「神州和道流空手道」とするが、久保義八郎から「神州」も「和道」も同じ日本を表わす言葉で重複するので、和道流だけでよいのではとアドバイスを受け、翌年から「和道流空手道連盟」となった。

繰り返しになるが、先生の胸の内には「天地人の理道に和す」の言葉が大きく占めていたこと想像に難くない。古い時代（大戦以前）の思想家や武道家など、必ずといっていいほど心の芯となる言葉を持っていた。それに比べると現代の著名人は「座右の銘」程度が精一杯のようである。

大塚先生が流派を立てるとき、唯一の本土出身空手家としての気概から「天地人

の理道に和す」を提唱し、「和道流空手道」と定められた。以来80有余年が経過し今その末端にいる我々は、もっと自信と誇りをもって修業に励まなければならないと強く思うところである。

次の書は私が所有する大塚先生直筆の色紙である。これは35年ほど前、山形大学空手道部後輩の武田 公氏（昭和36年理学部卒業、仙台市在住）から『自分待っているよりも、崇武館道場にある方が相応しい』として贈ってくれた貴重な品である。先生から度々ご指導を仰いでいた折、先生とご一緒に写真や色紙をお願いすることなどに全く気が回らない私であった。今にして思えば沢山ほしかったのに、残念至極でたまらない。



6 その他の道歌

古い教えやアドバイス、神妙な業に至るヒントなどを道歌に託す例は多い。ここに気付いたものを挙げて参考に供したい。道歌そのものや作者など紙面の都合で詳しく触れられないので、不明の点は読者諸氏で調べて頂きたい。

ここでお断りしておきたいことがある。そもそも道歌として残されるものや技法を記した巻物などは、誰から見られても支障をきたさない程度のものである。譬えば、他流派の人に見られ技を盗まれても大勢に影響しない範囲内に限られていたということ。秘伝とか奥義という門外不出の秘法や、一子相伝といって親子の間でもたった一人きり教えない技法は、書物や歌にして残しはしなかった。もし、その秘術を使って相手に見破られたら、その相手を殺さなければならなかった程である。

秘伝を教える手段としての道歌があったとしても、口から口へと伝えられる口伝とい

う方法であり、次の世代への伝授法や人選まで厳しい定めが付随していた。譬え途絶える場合があったとしても、命に懸けて秘技秘術は守ったのである。それは、禅仏教における『不立文字 教外別伝 直指人心 見性成佛』の言葉があるのと相通じるところである。

以下に掲げる道歌は、その意味から肝心要ではないと思ってほしい。

- ◎ 切り結ぶ 太刀の下こそ地獄なれ 身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあり・・・詠み人不詳
- ◎ 道場に 入るべきときは身を正し 心の鏡曇りなきよう・・・詠み人不詳
- ◎ 武の道は 仏の道と同じこと 修業なくては悟られもせじ・・・詠み人不詳
- ◎ 降ると見ば 積もらぬ先に払えかし 雪には折れぬ 青柳の枝・・・詠み人不詳
- ◎ つねづねに 五常の心なき人に 家伝の兵法印可ゆるすな・・・柳生石舟齋
五常＝仁義礼智信のこと。
- ◎ 中々に 里ちかくなりにはけり 余りに山の奥をたづねて・・・柳生石舟齋
- ◎ 心こそ 心まよ（迷）はす心なれ 心に心 心ゆるすな・・・澤庵宗彭（不動智神妙録）
- ◎ 懸かる時も 退く時も足はただ 居つかぬように 使うべきなり・・・柳生十兵衛
- ◎ 兵法に 勝たんと思う心こそ 仕合（試合）に負くる はじめなりけり
・・・柳生十兵衛
- ◎ 稽古とは 一より始め十に行き 十より還る元のその一・・・直新陰流
- ◎ 敵をただ 打つと思ふ（う）な身を守れ おのずからなる 賤が屋の月
・・・伊藤一刀齋 賤が屋＝さびれた家（奢り高ぶる心を諷める意）
- ◎ 極意とは 己が睫毛（まつげ）のごとくにて 近くあれども見えざりけり
・・・千葉秀作
- ◎ 谷川の 瀬々を流れる枒がら（殻）も 実を捨ててこそ 浮かぶ瀬もあれ
・・・千葉秀作
- ◎ 剣道の稽古は人に勝たずして 昨日の我に 今日は勝つと知れ・・・梶派一刀流
- ◎ 有りとすれば無し 無しとすれば有る 世の中の月だにうとき 夜半の影法師
・・・井上景雲
- ◎ 気は長く 心は丸く腹立てず 己小さく 人は大きく・・・鞍馬流剣法
- ◎ 居合とは 人に斬られず 人斬らず おのれを責めて 平らかな道・・・林崎甚助
林崎甚助＝林崎夢想流（居合道の始まり）の開祖、山形県村山市林崎の出身。
- ◎ 映るとも月は思わず 映すとも水は思わず 猿沢の池・・・自鏡流居合道
- ◎ 吹けば行く 吹かねば行かぬ浮雲の 風に任かする身こそやす（安）けれ
・・・自鏡流居合道
- ◎ 体と太刀 一致になりてまん丸に 心も丸に これぞ一円・・・自鏡流居合道

- ◎ 居合とは 心に勝つが居合なり 人に逆らふ(う)を非力とは知れ
・・・英信流居合術
 - ◎ 合気にて よろず力を働かし 美しき世と安く和すべし・・・植芝盛平
 - ◎ 手は待(たい)に 足は懸(けん)にてたゆみなく 行く水鳥の心なるべし
・・・大島流槍術
 - ◎ 空手とは 人に打たれず人打たず ことのなきを基とするなり・・・小西康裕
 - ◎ 何事も 打ち忘れてたりひたすらに 武の島さして漕ぐが楽しき・・・摩文仁賢和
 - ◎ 春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて涼しかりけり・・・道元(曹洞宗開祖)
- 註：良寛辞世の歌に『形見とて何残すらむ 春は花 夏ほととぎす 秋はもみぢ葉』があり、私はこの二つの類似性を思う。良寛は曹洞宗の僧であるから当然道元のこの歌を知っているはずで、遙かなる高祖の歌と同じような悟りの心境にありたいと望んで当然かもしれないが、良寛晩年の心境は壮年期と違いがあったのではと私は思っている。良寛辞世の句に『散る桜 残る桜も 散る桜』がある。この方がむしろ現実的に思える。

7 辞世の句

前項まで、今回のテーマとし大塚先生にまつわる事柄と、他にも道歌と言われるものを述べてきた。しかし、道歌はいかにも教訓じみて形苦しい感が免れない。それに比べれば「辞世の句」(言葉、俳句、短歌など)の方は本音が現れていたり、この世への尽きない未練であったり、本心は無念なのに滑稽味で補ったり、一見達観したかのようにも人間臭さと本音を垣間見ることできて人心に近付くことができる。

それに、「辞世の句」といっても前もって作っておくことできるから、その刹那の心境とは限らない。死期を察し心の準備もなく作るなら本物といえようが、それはごく少ないような気がしてならない。

本題から離れるこの項は、武道に限らず修業者は日々死を覚悟して生きていた時代もあっただけに、我々武道家と無関係とは言えない。

手元の資料には沢山の「辞世の句」があって、掲載の選択に困るほどであった。掲載は順不同なので申し訳けなく思う。

- ◎ 倭は国のまほろば ただなずく青垣 山隠(こも)れる 倭し美(うるは)し・・・
倭建命
- 註：この歌は、ワンポイントレッスン2月分の一つのテーマとして書いてある。
- ◎ 生のはじめに昏(くら)く 生の終わりに冥(くら)し・・・空海
昏=目が見えず暗い 冥=おおわれて光がない
 - ◎ 心形久しく労して 一生ここに窮まれり・・・最澄
 - ◎ 願わくば 坐して死なん・・・鑑真和上(奈良時代の帰化僧)

- ◎ つひ (い) に行く 道とはかねて聞きしかど 昨日今日とは思わざりしを
・・・在原業平
- ◎ 願わくば 花の下にて我死なん その如月の望月のころ・・・西行法師
- ◎ やがて討手を遣わし 頼朝の首を刎ねて我が墓の前に懸くべし それぞ孝養にてあ
らんずる・・・平 清盛
- ◎ かかる時 さほど命の惜しからめ かねて亡き身と思ひ知らずば・・・太田道灌
- ◎ 四十九年一睡に夢 一期の栄華 一杯の酒・・・上杉謙信
- ◎ 心しらぬ 人は何とも言わばいへ (え) 身をも惜しまじ名をも惜まじ
・・・明智光秀
- ◎ 露と落ち 露と消えにし我が身かな 難波の事も夢のまた夢・・・豊臣秀吉
- ◎ 嬉しやと 二度さめて一眠り うき世の夢は暁の空・・・徳川家康
- ◎ 武蔵野の 草葉の末に宿りしか 都の空にかえる月かげ・・・東福門院和子 (二代
将軍・徳川秀忠の三女、後水尾天皇の中宮、明正天皇の生母)
- ◎ 曇りなき心の月を先だてて 浮世の闇を照らしてぞ行く・・・伊達正宗
- ◎ 西に入る 月を誘い法を得て 今日ぞ火宅をのがれけるかな・・・春日局
火宅=煩惱苦悩に満ちたこの世を、火災で燃え盛る家に譬えた。法華經の一文。
- ◎ 風さそう 花よりもなお我はまた 春の名残をいかにとやせん・・・浅野内匠頭長
矩 (播州赤穂藩第三代藩主・忠臣蔵で知られる)
- ◎ あらたのし 思いは晴るる身は捨つる 浮世の月にかかる雲なし・・・大石内蔵助
- ◎ 旅に病んで 夢は枯野を かけ巡る・・・松尾芭蕉
- ◎ 盥 (たらい) から 盥へうつる ちんぷんかん・・・小林一茶
- ◎ 白梅に 明くるばかりとなりけり・・・蕪村
- ◎ 月を見て われはこの世をかしくかな・・・加賀の千代女
かしく=「悴く」で、やせ衰える意味から死を連想させる表現。
- ◎ 越し方は 一夜ばかりの心地して 八十路あまりの夢をみしかな・・・貝原益軒
- ◎ 散りぬべき 時知りてこそ世の中の 花も花なれ 人も人なれ・・・細川ガラシャ
- ◎ あの世にも 粋な年増がいるかしら・・・三遊亭一朝 (江戸時代末の落語家)
- ◎ 宗鑑は いずこへ行くと人問わば ちと用 (癰) ありてあの世へといえ
・・・山崎宗鑑 (戦国時代の俳諧師) 癰=悪性の腫れもの。
- ◎ 東路に筆を残して空の旅 西のみくにの名所を見む・・・安藤広重
- ◎ この世をば どりゃお暇をせん香の 煙とともに灰さいなら・・・十返舎一九
- ◎ 人間五十年の究まり それさえ我にはあまりたるに・・・井原西鶴
- ◎ かくすれば かくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂・・・吉田松陰
- ◎ 身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留 (とどめ) 置かまじ大和魂・・・吉田松陰
- ◎ 腹いたや 苦しき中に 明け鳥・・・山岡鉄舟 (鉄舟は)
- ◎ まだ足らぬ 踊り踊りてあの世まで・・・六代目・尾上菊五郎 (1885~1949年)

- ◎ あら嬉し 行先知れぬ死出の旅・・・大前田英五郎（江戸時代末期の侠客）
- ◎ 一代聖教みな尽きて 南無阿弥陀仏に成り果てぬ・・・一遍
- ◎ かかる時 さこそ命の惜しからめ かねて亡き身と思ひ知らずば・・・澤庵宗彭
- ◎ 渾身求むるところなく 活きながら黄泉に陥つ・・・道元
- ◎ 心頭滅却すれば 火もまた涼し・・・快川紹喜
 註：塩山市恵林寺の住持で、織田宣長の焼討ちにより一山の僧とともに焼死した。伊達正宗の師となった虎哉宗乙は快川の弟子で、焼討ちを察した快川は宗法を守るため虎哉を逃した。
- ◎ 昨日といい 今日とくらしてあすかがわ（飛鳥川） 流れて早き月日なりけり
 ・・・小堀遠州
- ◎ 来し道も 帰る道にも只独り のこる姿は草の葉の露・・・松前公広（蝦夷松前藩第二代藩主）
- ◎ 石川や 浜の真砂は尽きるとも 世に泥棒の種は尽きまじ・・・石川五右衛門
- ◎ 散る桜 残る桜も 散る桜・・・良寛（1831, 2, 18 死亡）
- ◎ 碁なりせば 劫（こう）など打ちて生くべきを 死ぬるばかりは手もなかりけり
 ・・・本因坊算砂（安土桃山・江戸時代初期最高位の棋士、本因坊家の始祖。元は顕本法華宗寂光寺塔頭）
- ◎ おもしろきこともなき世を おもしろく・・・高杉晋作
- ◎ 余は 石見人森林太郎として 死せんと欲す・・・森鷗外
- ◎ 愛の前に 死がかくまでも無力なものだとは この瞬間まで思わなかった
 ・・・有島武郎
- ◎ これでよし 百万年の仮根かな・・・大西瀧治郎（旧日本軍・海軍中将、特攻隊を指揮し終戦直後自決）
- ◎ 行列の 行きつくはては 餓鬼地獄・・・荻原朔太郎
- ◎ いまわの際に 言うべき一大事なし・・・山田風太郎

（この項、終わり）